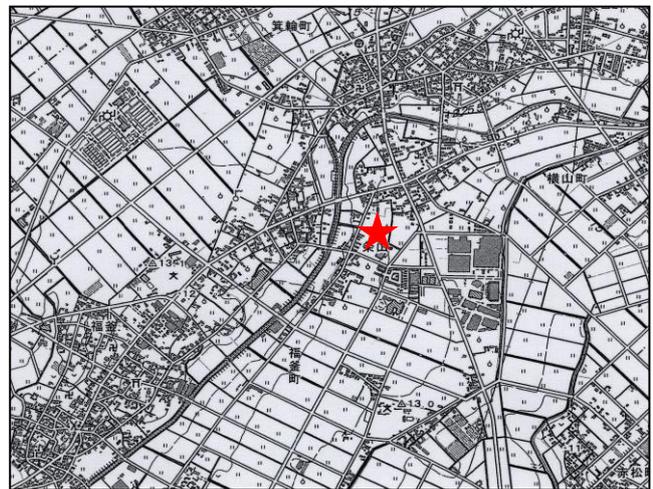


18 夕景（安城市福釜町砂渡）



夕暮れの日常の光景です。
田植え作業も一段落し安堵感が漂います。遠くに見える携帯電話用無線基地局は改修工事になり、上部がシートで覆われつぼみのようにふ

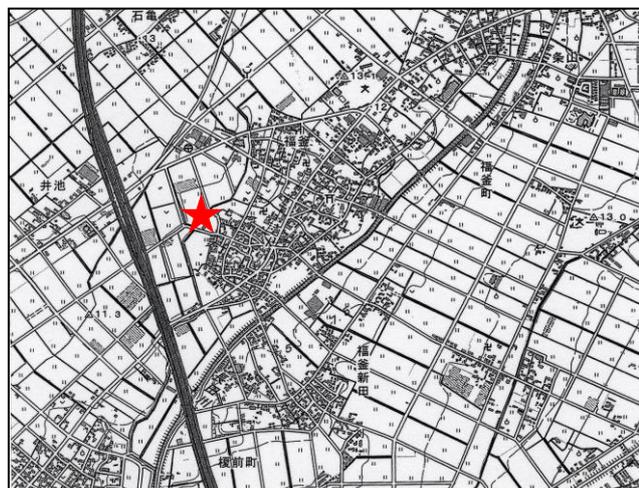


つくらしています。そこに夕暮れの太陽が重なり、夕日が灯台のように温かさと安らぎを村に与えています。

19 町名遺蹟 釜ヶ淵 (安城市福釜町釜ヶ淵)



福釜の町名発祥の地で、釜ヶ淵と言っています。昔、このあたりから清水が湧き出ている、そこから黄金の釜が吹き出してきたと言われ、「吹く釜」から福釜になった



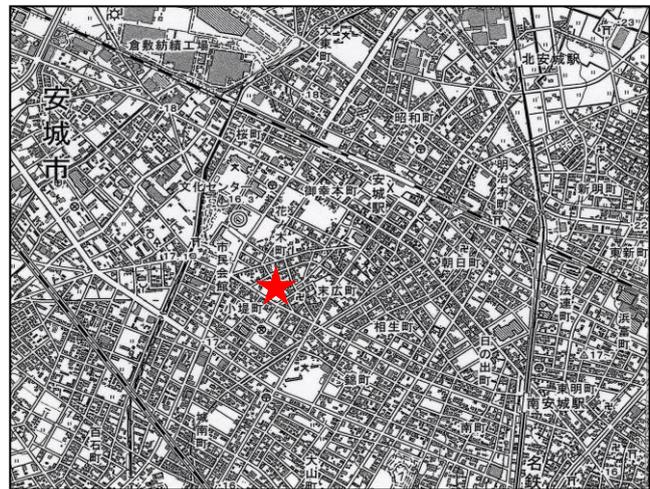
と語り継がれています。碑の裏面にその伝承が記されています。

碑文「口碑に往古此処より黄金の釜吹き出しと、矢来福釜と称せし由、今の此の地の湮滅を恐れ碑を建て之を後世に伝えんとす」昭和41年12月
*ここは、西中学校区「奥の細道コース～釜ヶ淵～」に指定され、生徒の俳句が掲示されています。

20 山車2基 (安城市花ノ木町 八幡社)



昭和30年代、安城駅前の商店街は豊かで活気があり、駅南側の4町では山車を1基ずつ所有していました。それらは4月の八幡社祭礼で町内を巡行し、決まった場所



で神楽舞を奉納していました。神楽や舞の練習はたいへんでしたが、地元民のあこがれの役でもありました。現在は八幡社の山車倉庫に保管されています。

*左の山車…御幸本町のもの、右の山車…栄町のもの。

2 1 町内の安全を守る常夜燈（安城市小川町南加美）



小川町南加美集落内の辻に建っている常夜燈です。昭和8年5月、地元の石工により建立され、また、隣の秋葉神社は、昭和8年癸酉5月16日の棟札から、村の人々によ

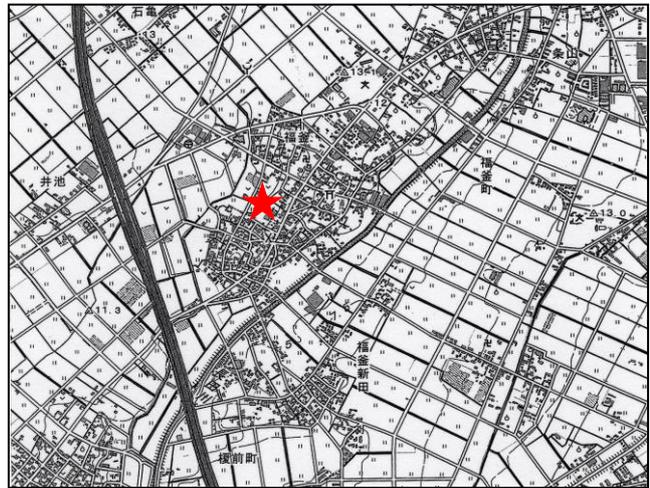


よって同じ頃に建立されました。安城市内には、今でも多くの常夜燈が残されており、今夜も、その灯りは、町内の安全のために照らし続けています。

2 2 西岸寺の鐘楼（安城市福釜町蔵前）



「夕焼け小焼」の歌詞のように、毎日午後6時になるとお寺の鐘が鳴ります。村の人たちはその音を聞いて一日の区切りをつけ、家路に向かっていきます。戦時中に梵鐘を



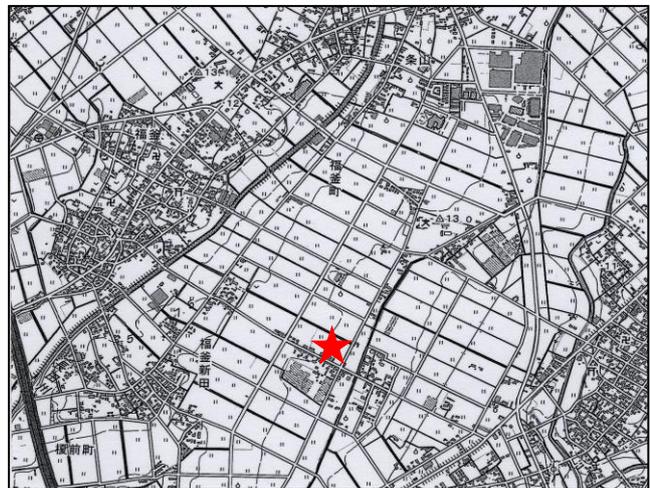
供出し、三河地震で倒壊した鐘楼は、昭和44年3月に再建され、荘厳な鐘の音色を毎日響かせています。

石垣は、大正10年5月に聖徳皇千三百年遠忌記念で建立されました。
（石工・旧桜井村の川澄兵次郎）

2 3 小栗新田の稲荷社（安城市福釜町横山）



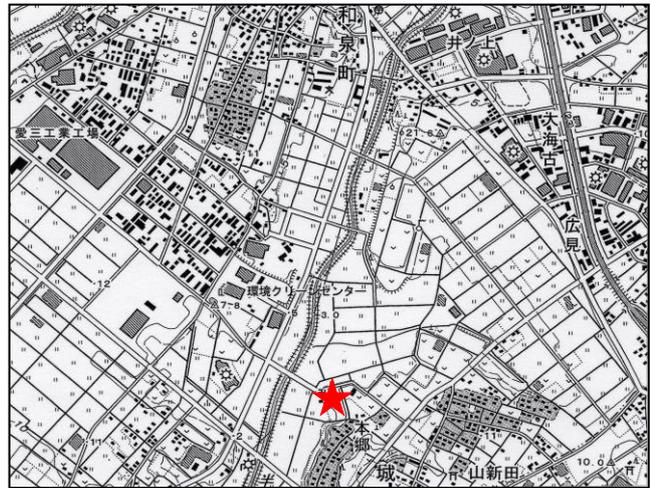
明治用水支流の花の木用水が、明治18年にでき、その地区を開墾した人々によって建てられた稲荷社です。当時、知多の豪商・小栗富治郎が買い取った土地なので、小栗新田と言われ、今もその名称が受け継がれています。開拓者20数件が明治30年に稲荷社を建て、その末裔が世話し続け、毎年4月29日に祭礼を行っています。



2 4 城ヶ入の子安観音 (安城市城ヶ入町稲場)



この由緒書によれば、771年に一堂を建て「亀燈山龍燈寺」と名付けられ、その後1604年に廃寺となります。そして、江戸時代中頃に城泉寺の慶信僧侶がそこ

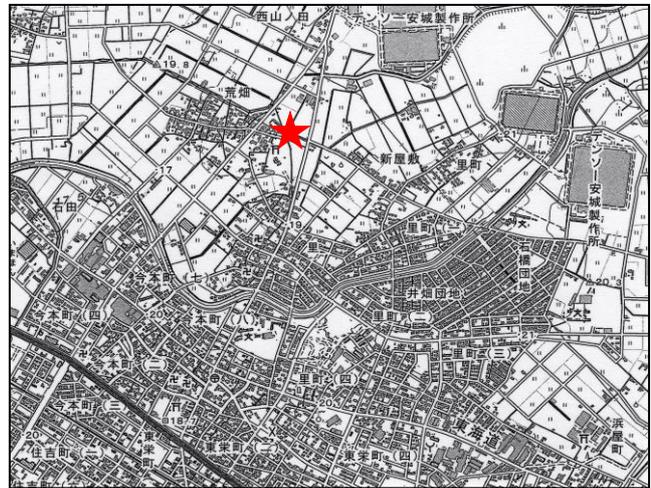


に一堂を建て子安観世音菩薩を祀って、今日に至ります。本堂の周り一円に観音菩薩石像が、西国三十三寺巡りのように番号順に置かれています。城ヶ入の人たちが熱心に世話をされていて、生花が供えられています。

25 鎌倉街道のお地藏さん（安城市里町西宮）



不乗森神社の北を通る鎌倉街道の四つ角に、お地藏さんがひっそりとたたずんでいます。村のあちこちで見かける普通の風景で、ここでも世話する方が熱心に生花を



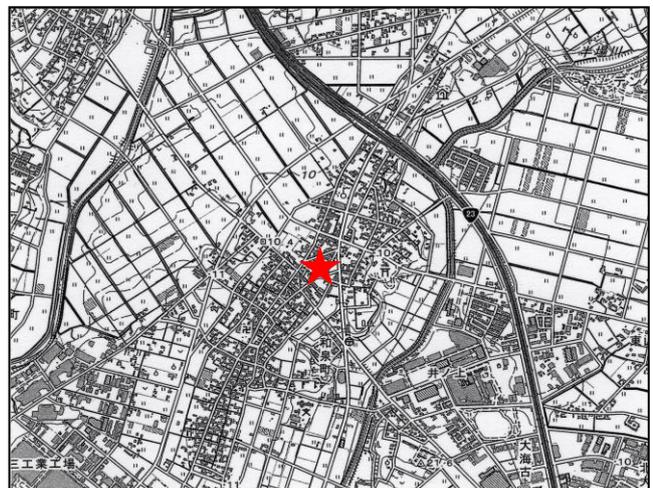
手向けています。隣には、この辺りに縄文時代の石鏃が出土した二タ股遺跡があったことを示す石碑があり、さらに、歌詞を詠んだ梅泉居歌碑もあります。

歌碑「馬降りて 神の威徳を かしこみて 鎌倉街道 過ぎしもののふ」
(昭和17年7月建立)

26 地蔵堂とお地蔵さん（安城市和泉町上之切）



小さい子どもを母のように慈しみ、立派な人になるように守ってくださる菩薩、お地蔵さん。地元の6軒の方がお世話をしています。頭頂部から台座のハスの下まで高

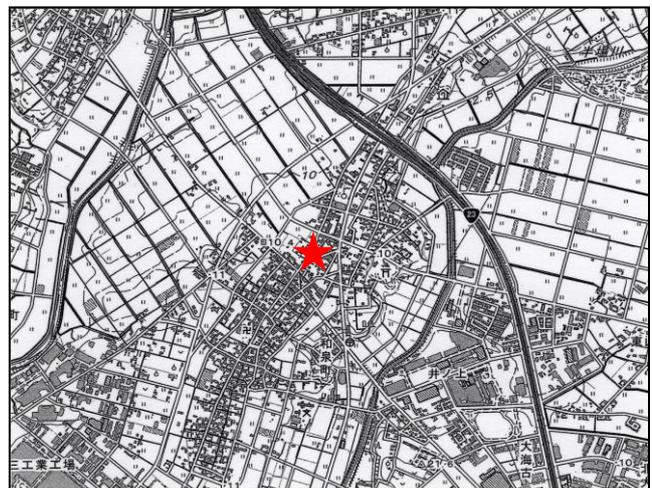


さ1m50cmあります。優しい温和な世界を象徴する姿に、「いつもありがとう」と感謝せずにはられません。毎年2回、2月24日と8月24日に地蔵盆をしています。明治40年に建てられ、昭和58年8月に修復再建しています。

2 7 黒塀のある家並（安城市和泉町上之切）



昔、この道で子ども達はどんな遊びをしていたでしょう。子どもの目線で見ると、この黒塀はかなりの存在感で迫ってきます。成長するにつれて目線が変わると黒塀

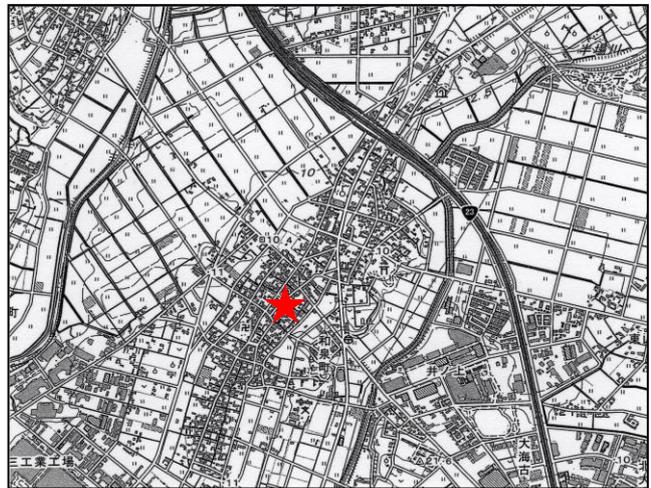


の印象も変わってきます。そのことが自分の成長を自覚する機会になります。大人になって当時を思い出すと、この黒塀と見越しのマツは、幼いころの記憶がよみがえる懐かしい風景です。

28 漆喰となまこ壁がある家 (安城市和泉町上之切)



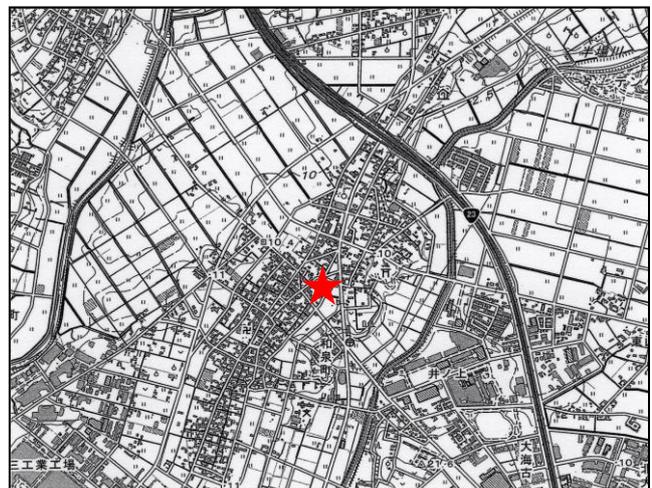
なまこ壁と白壁の美しい家並みが、和泉町内で見ることができます。白色の斜め格子目模様をなまこ壁と言います。この家は酒屋を営んでいた家で、りっぱな土蔵が保存されています。



2 9 旧明治郵便局（安城市和泉町上之切）



明治時代の建築様式を彷彿させる景観を残しています。明治44年に碧海郡明治村の篤志家により建てられた局舎と官舎の2つの建造物は、平成19年に安城市指定

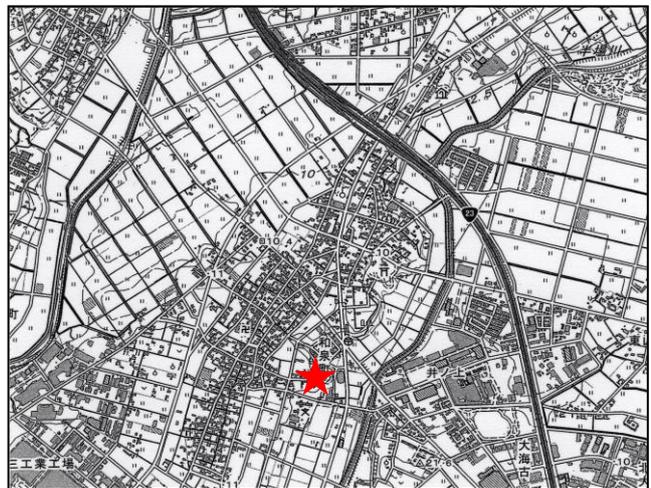


建造物に登録されました。当時のままで現存し、どちらも鬼瓦には〒記号があり、明治時代を体感できます。玄関前には、懐かしい丸形郵便ポストもあります。

30 和泉のそうめん作り (安城市和泉町中本郷)



三河湾から矢作川を通る海風は、手延べそうめんの乾燥にとっても効果的です。手作業で数mまで延ばした生麺を、洗濯物を干すように、太陽による天日干しと湿り気



のある南風が調和されて、麺の風味やこしの強さを引き出しています。そうめん作りは、和泉の気候と風土に適した地場産業であり、「手延べ半生そう麺」は贈答品としても、たいへん人気があります。

3 1 参加者の声

【間下 栄子】

丈山苑の裏側にある側溝の水には、昔ながらの清水が湧き出ていたことでしょうか。子ども達は、そこでどんな遊びをしていたのでしょうか。夏には、トマト・キュウリなどをそこで冷やしながら、水かけっこなどして楽しんだでしょうか。今は、どんどん道路が整備され、泉（清水）がどんどん減っていく。安城の原風景がどんどん消えていくことは寂しいですね。黄金色の麦畑がとても目に焼き付いています。

【鈴木美千子】

安城の原風景に接すると、過去から現在にいたる人々の長い歴史を感じます。開発によって自然が失われていくのは、世の流れだとは思いますが、便利さの代償として自然と共存する心が失われていくことを危惧します。心からほっとする原風景を次の世代に残していきたいと思います。

【神谷 幸男】

安城の原風景を見つめて、私はこの講座に今回初めて参加しました。1回目に、安城の自然・文化を知る天野暢保先生による原風景の講座では、明治用水や銘水等まで解説していただきました。2回目はマイクロバスに乗車して、会員で福釜町や和泉町を散策しました。福釜城の城跡や和泉のお地藏さん等を見て回り、自分の住んでいる地区や各地区の旧跡等のあることを知りました。3回目は、神谷輝幸先生の講話を聞きながら、今まで撮影してきた原風景の写真を見ることができました。人生75年間、何となく過ごしてきたと感じています。今回の「安城の原風景をみつけよう」に参加して、とても楽しかったです。

【神谷 友和】

安城の原風景を考えることは、とても楽しいことです。「自然との暮らし」を考えながら、安城のふるさとを見直す機会にもなりました。心のよりどころとして、安城の原風景を残し活用できるようにしていきたいです。会員の方と散策しながら情報交換もでき、有意義なものでした。市街化や工場の建設などで地域の開発が進んでいます。安城の原風景を、私たちの「ふるさと」として位置づけていきたいと思います。そして、郷土に愛着をもってほしいと願っています。

【寺島 正彦】

名古屋市鳴海で生まれ育った私ですが、父の実家は榎前町井杭山でした。子どもの頃、夏にはよく父の原動機付自転車の後ろに乗せられて来ました。大高駅から国鉄で来たこともあり、安城駅からボンネットバスに乗車して和泉まで来て、そこから井杭山まで歩きました。家に近づくと、クマゼミのシャーシャ

一という鳴き声が響き渡っていました。家の横には梨畑・鶏小屋などがあり、今から思えば日本デンマークの名残だったのでしょう。帰りには、いつも三河万歳をやっている伯父さんの家に立ち寄りしました。その後、転勤などで他県に住むことになったときには、毎年夏になると、母が和泉の手延べ長そうめんを送ってくれました。梨・そうめん・三河万歳につながるものが私の安城の原風景になっています。自然・歴史・文化にそれぞれ残すべきものはあると思いますが、とにかく「日本デンマーク」を想起させてくれるものは、原風景として後世に伝えていきたいです。

【神谷 豊彦】

私の安城の原風景の基準は、昭和20年代から30年代の風景です。春は土筆(つくし)やヨモギの若葉を摘んで草餅を作りました。麦畑やレンゲ畑より飛び上がる雲雀(ひばり)、夏の水田、秋の稲刈り、冬の藁で作ったすずみ等、今では見るのが少ない風景です。生活が豊かになり便利になるにつれて、失われていくのは必然かもしれません。しかし、自然に関しては必要最小限とし、できる限り後世に残していきたいです。

【神谷 輝幸】津和野の風景「新築より改築・増築」

老朽化した民家を次々に再生し、存亡の危機にあった新潟県の山奥にある集落を、カール・ベンクスというドイツ人建築デザイナーが救いました。日本の古民家はその価値が再発見されています。私が島根県津和野を訪れたとき、水路を泳ぐコイは良く紹介される風景です。私が驚きの目を見たのは、それとは違う風景でした。津和野では、武家屋敷もよく保存されています。その一角に津和野町役場・津和野庁舎がありました。外見は武家屋敷ですが、中を覗いてみますとコンピュータを操る現代人が仕事をしているではありませんか。歴史を保存し、現代に生かす思想が、人々を引き付けやまない佇まいにしているものだと感じ入りました。



【クロマツ (市の木)】



【恵みの水 (矢作川)】



【サルビア (市の花)】

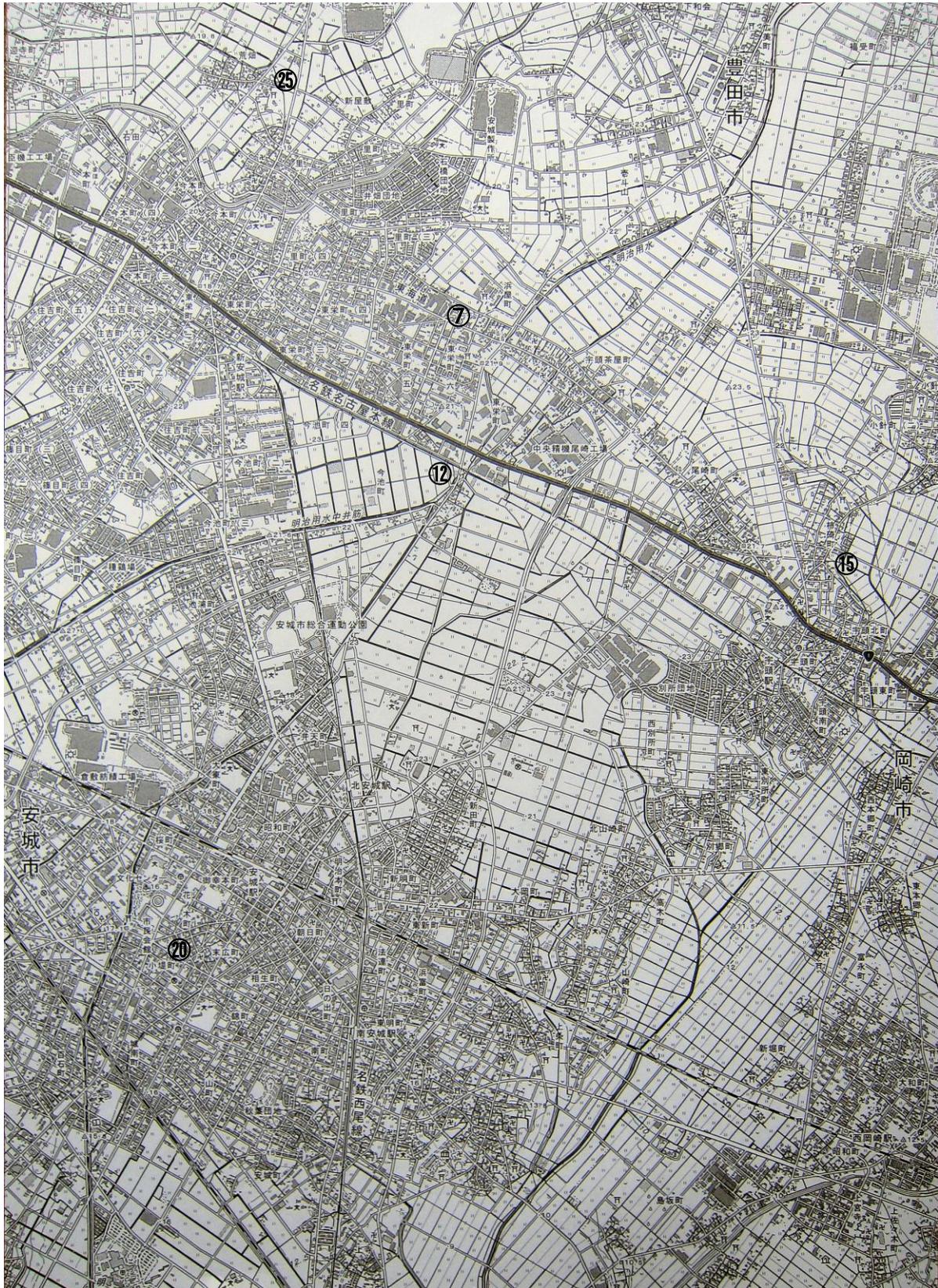
3 2 原風景の位置図(1)



原風景の位置図(2)



原風景の位置図(3)





あとがき

3年間に渡り、皆様といっしょに安城の原風景を探してきました。その間、失われてしまったり変わってしまったりした風景に一抹の淋しさを感じました。また、そのままの変わらぬ風景を見てほっと落ち着きました。それぞれの原風景から、先人の生活が垣間見られ、また幼い頃の思い出が甦り、心が癒やされ、さらに、歴史や文化も感じることができました。そんな原風景が消えてしまったら、とても残念に思う方も多くおられることでしょう。

今回、懐かしいふるさと安城の原風景を集めてみました。そこにはその土地で暮らした人々の思い出が蓄積されています。私たちは昔の風景を残しながら新しいものを積み上げていくことが、安城のまちが人々の癒しの空間となることを信じています。単に、新しいものに造成していくのではなく、原風景を大切にし、そこに新しい風景を積み上げていきたいものです。安城の原風景が心のふるさととして、いつまでも皆様の心に残り、思い出と共に心の癒やしになれば幸いです。その風景は、私たちが過去から未来へといざなっていきます。

3年間の市民企画講座に参加してくださった方、原風景について語ってくださった方に、深く感謝します。地域に偏りが見られますが執筆者の思い出とも関連しますのでご理解をしてください。末尾ながら運営に携わっていただいた文化センター職員の方にも感謝します。この小冊子が少しでも皆様のお役に立てることができれば、この上ない喜びになります。
(古居敬子)

＜執筆者＞	神谷輝幸	古居敬子	間下栄子	鈴木美千子
	寺島正彦	神谷豊彦	神谷友和	神谷幸男



市民企画講座「ふるさと安城原風景みつけ隊」（生涯学習課）事業

『 安城の原風景 写真集 』

～未来に語り継ぎたい景色～

非売品

発行 令和元年12月24日
編集 安城市桜町17番11号 安城市文化センター内
ふるさとの原風景みつけ隊（代表 古居敬子）